

学位論文題名

国民的独立のパトスとロゴス

- ドモフスキとポーランド問題 1893-1917年 -

学位論文内容の要旨

本稿は、世紀転換期から戦間期にかけ活躍したポーランドの政治家、ロマン・ドモフスキ (Roman Dmowski, 1864-1939) の政治思想を描き出そうと試みたものである。

ドモフスキは、世紀転換期以降、とくに第一次大戦中の欧米諸国において、「ポーランド問題」を国際政治の舞台の前面に提示すべく全力を傾け続けた政治家・外交家として知られている。また、その政治思想は、ポーランドの国民的な統一と独立を目指すパトリオティズムであり、戦間期ポーランドにおける国民形成過程を先取していた。

本稿は、「第Ⅰ部 全ポーランド主義」、「第Ⅱ部 帝国と革命」の全7章と補章で構成され、ほぼ時系列に沿った形で展開している。例外として、「補章 ポーランド問題とは何か」のみ独立したテーマを取り上げている。ドモフスキの政治思想において、またポーランド政治において、「ポーランド問題」が全体を貫く鍵概念となっているため個別の扱いとした。

第Ⅰ部 (第一章から第四章まで) においては、ドモフスキの思想的特徴と、その政治的背景を検討した。第一章は研究史を分析し、これまで彼に与えられてきた毀誉褒貶の相半ばする評価が生じた理由について述べた。第二章以降では、1890-1900年代に形成された彼の政治思想の主要な特徴を分析している。

彼の思想における第一の特徴は、「全ポーランド主義」と呼ばれる考えにある。これは、三支配帝国によって引かれた分割線と、階級の格差とを超越し、ポーランドの統合を目指すという考えを指す。ドモフスキ最初の政治論文『我々のパトリオティズム』(1893年) にその起源が見られるため、同書の内容と共に第二章において詳述した。

第二の思想的特徴は、社会ダーウィニズムに深い影響を受けた民族観であり、『一現代ポーランド人の思想』に最もよく表れている。そのため、彼の民族観とその背景については、第三章において、この著作及び彼の西洋体験も踏まえ詳しく論じた。

第三の特徴は、権力政治の現実を冷徹に認識するリアリズムと、民族への献身を厭わないパッションとが、彼の思想の中に共存している点である。この点については、第四章に詳述した。

以上の第Ⅰ部をもってドモフスキの思想的側面を分析した上で、「第Ⅱ部 帝国と革命」においては、ポーランド国家成立を目指すドモフスキの「全ポーランド主義」が、彼のもう一つの思想的柱である「ドイツ脅威論」とともに、1908年のバルカン危機以降の国際政治的な文脈において、どのように展開していったのかを検討する。

まず第五章においては、帝国論としての側面からポーランド及び分割三帝国の関係を検討する。この際に鍵となるのが、分割後のポーランドが体現した二重の帝国性である。

18世紀の三次にわたる分割により、ポーランド=リトアニア共和国は消滅した。その点において、ポーランドは三帝国に支配された、帝国の拡張的政策の犠牲者であった。しかし分割以前のポーランドは最盛期には広範な東部領域を含んでおり、そこに住むルテニア人やユダヤ人にとっては、ポーランドもまた帝国として存在していた。複数の民族集団をかかえ、多重的な言語・宗教・文化集

団から構成されるという帝国性をポーランドは備えていたのであり、それは三帝国によって分割された後も維持された。19世紀から世紀転換期にかけてのナショナリズムが伸張した時代において、外部から三分割され、内部においては多様な集団を抱え込むという内外二重の帝國的構成が、そこで展開される運動と思想の背景となっていたのである。

ドモフスキの思想もまた、そうした背景のもとに成立した。第六章に詳述するように、分割された古い帝国であるポーランドは、近隣帝国のうちいずれかを選び、その枠内においてまず統一し自立しなければ存続できない、と（少なくとも第一次大戦の帰趨が明らかになり始めるまで）彼は考えていた。ドモフスキが初めてドイツ脅威論を明確に説明した『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』（1908年）は、三帝国のうちいずれを選ぶのかを統一的スキームで分析した概念論であり、いわばドモフスキの「新しい帝国」論であった。

そして第七章にはいる前に、補章として「ポーランド問題」とは何かを整理した。この章においては、ヨーロッパ外交においてポーランド問題が持つ複合的な文脈と意味をおさえ、ドモフスキが目指した解を理解する際の一助とした。なぜなら、彼の「全ポーランド主義」と「ドイツ脅威論」は、ポーランド問題を生んだ国内的・国際的要因に対応したものであったと考えられるためである。

先述のように、ポーランドが分割された原因の一つは「シュラフタのネイション」の衰退にあった（国内的要因）とドモフスキは考えていた。そして、それに対しては「全ポーランド主義」による国民創出をもって対応しようとした。

但し、この問題を創出したもう一つの直接的要因は三帝国による分割という国際的要因であるため、「全ポーランド主義」が唱える領域的統合を実現するためには、この問題を分割列強の内政領域から国際政治の場に引き出すことが不可避であった。そしてそこにおいて、「ドイツ脅威論」に基づく外交を通じ、国際的要因の再現を防ぎうる形でのポーランド国家の成立について国際的承認を得ることが必要であった。

そこで、最後に第七章においては、第一次大戦前後のロシアおよび英仏米におけるドモフスキおよび国民民主党陣営の外交を分析する。現実の外交過程において、ドモフスキらの短期的目標は戦況の変化や参戦各国の動向によって刻々と変化したが、しかし一貫していたのはドイツ脅威論を原則とし続けた点であった。この章においては、第一次大戦中の彼らの活動が、連合国側においていかなる過程を経て承認され正統性を付与されたのか、また、独逸側と協同するポーランド人諸派との正統性をめぐる競合がどのように収束したのかを検討する。

従来の研究においては、彼の外交的成果はウィルソンの「十四か条」に象徴されるヴェルサイユ講和会議にあるとされてきた。しかし、本稿においては、一九一七年革命を契機として、連合国側がドモフスキを中心とするポーランド国民委員会を正式に承認し、将来のポーランド国家を代表する正統性を付与するまでの一連の流れに彼の最大の外交的成功があったという仮説をとり、この過程に焦点を当てている。

以上のように、三帝国に分割されたポーランドの世紀転換期を改めて考察し、そこでのドモフスキの思想と行動を追うことにより、彼の政治思想を再検討し従来の評価を修正することが可能となる。しかし、それだけではなく、彼の政治思想の背景も視野に入れることで、それを涵養した環境たるポーランドがもつ二重の帝国性や、第一次対戦前後の国際政治情勢を考えることにもなる。それ故に、ドモフスキの生涯をたどることは、世紀転換期から戦間期にかけての国際政治情勢ひいてはその中で重きをなした「ポーランド問題」、そしてポーランド史に、新たな視野を開くことになるであろう。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 中 村 研 一
副 査 教 授 遠 藤 乾
副 査 准教授 吉 田 徹

学 位 論 文 題 名

国民的独立のパトスとロゴス

—ドモフスキとポーランド問題 1893-1917年—

(1) 論文の概要

宮崎悠の学位論文「国民的独立のパトスとロゴス —ドモフスキとポーランド問題 1893—1917年—」は、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてヨーロッパ国際政治史の一大争点となった「ポーランド問題」の解決を求めた、ポーランド人政治家・外交家ロマン・ドモフスキの行動と思想を分析したものである。

論文の紙数は、A4版×183枚。二部・八章より構成される論文の概要は、まず前半では、主にドモフスキの「全ポーランド主義」というナショナリズム的な思想の核心、および、ポーランドを分割して植民地化していたロシア領ポーランドにおいてドモフスキが創設した政党・国民民主党の活動を分析した。また、後半では、ヨーロッパ外交上の争点としてのポーランド問題の解決をめぐる、外交権を有しないポーランドの一政治家であったドモフスキが、ロシア・ドイツ・オーストリア・イギリス・フランス・アメリカ合衆国、およびルテニア人民族運動などに対して、いかなる行動をとったか、ヨーロッパ外交のダイナミズムのなかでドモフスキの外交的行動の何がポーランド独立に貢献し、そこにどのような限界があったか、を考察した。

(2) 評価の概要

論文評価の観点は以下の四つ。第一に、ポーランド内外の膨大な歴史学の先行研究を把握して、その研究状況のなかで有意性のある論文テーマを発見できるか。第二に、各地に散る史資料を、各地のアーカイヴを訪問して、ポーランド語をはじめとする諸言語で書かれた史資料を、解読できるか。第三に、帝国研究やナショナリズム分析などの理論面で、独創性ある新しい観点を提示しているか。第四に、論文としての基本的体裁と完成度をもっているか。その評価は以下の通り。

(2-1) 先行業績に対する本論文の有意性

ドモフスキの母国であるポーランド、英語圏、日本には、相当量のドモフスキ研究の蓄積があり、また、現在もポーランドの学界と世論において、ドモフスキはいまだに論争の対象であるが、そのなかで、本論文の有意性は、以下の3点である。

- ① ドモフスキの思想形成期から1917年までの政治活動を、ドモフスキ自身の著作・論文を包括的にサーベルすることによって、時系列的に一貫した分析したこと、
- ② ポーランド世論および学界でのドモフスキに対する通説的解釈（反蜂起主義、新ロシア主義、反ユダヤ主義等）に対する再解釈（公然議会主義、ドイツ脅威論、二重の帝国）を試み、その過半について、説得的に論述していること。
- ③ それまで学界で体系的に分析されてこなかったドモフスキの外政論の思想的分析を試みたこと。

以上より、本論文には、先行研究に対する存在理由が明らかに存在する。

（2-2）史資料の閲読

本論文に関連する史資料には、ポーランド語、ドイツ語、ロシア語、英語のものがある。

- ① 著者は、数次のポーランド留学によって、日本人のなかでは優れたポーランド能力を持ち、また、ポーランド内のアーカイヴを掌握している。
- ② 筆者は高い英語の解読力をもち、また短期間であるが英国に滞在して、ドモフスキの英国滞在中の活動に関する史資料を閲読している。ただし米国の外交アーカイヴ資料に直接はあたっていない。
- ③ ロシア語・ドイツ語に関しては語学能力が十分でなく、またこれらに関しては現地アーカイヴを訪問しておらず、日本にある資料と二次文献に依拠している。

上記のうち②の一部と③に関して、一部に資料閲読の不足があるものの、論文全体の論旨のためには、これらの閲読上の不足は、深刻な欠陥とはなっていないと評価できる。また閲読の不足は、今後のドイツ・ロシア、米国等の訪問によって、補うことが期待できると判断できる。

（2-3）理論的独創性

本論文は、三帝国に分割されたポーランドのナショナリズムと政党活動による統合とその限界、分割される以前にはヨーロッパ外交において帝國的地位をもっていた二重の帝国性、リアリズムを認識枠組みとして打ち出している。

- ① 統合論に関しては、国民民主党がロシア領ポーランドだけでなく、ドイツ領およびオーストリア領においても政党活動の展開を試みながら、三分割領の統合には成功しない点については説得的に分析されている。
- ② 二重の帝国性に関しては、ポーランドがかつて帝国であったこと、それがポーランド・ナショナリズムの発展にとって遺産となるとともに、それ以外のルテニア人などの少数民族に対して無関心であることを包括的に説明する枠組みとしては、魅力的な枠組みの提示である。ただし、枠組みを十分に生かして歴史的分析を進めていない部分も散見される。
- ③ リアリズムに関しては、その概念を一貫した分析の鍵概念として用いている。ただしリアリズムの概念規定に揺れが見られ、また外交分析に十分生かされているとは言い難い面が残っている。

以上より、本論文は、各面で、独創性をそなえた理論的分析がそなわっている。理論的に魅力的な国際政治史の地平を試論の域ではあるが展望している。その他方で、斬新な枠組みを十分に生かしきれて居ない恨みがのこるが、それらも今後の研鑽・整理によって十分に補いことが可能であると評価される。

(2-4) 論文の体裁と完成度

本論文は大作であり、一般人は知りえない対象をあつかい、さらに国際政治史においてもきわめて複雑な対象をとりあつかっている。その分、記述の一部に粗密が残り、トルソー的記述が散見される。また構成に関しても一部に工夫の余地が残っている。ただし、これらは短期間のうちに大作を完成させた筆者の力量の裏面であり、今後容易に改良できると評価できる。

以上より、本論文は博士（法学）の称号を授与するにふさわしいと、審査委員三名一致で評価した。